

勝保沢中ノ山遺跡出土の石器について

岩崎 泰一

註1 第63図参照。

総計4,277点の石器^{註1}の多くは包含層より出土している。これらは明確な分布域を形成することなく多時期に亘る土器群とともに出土しているため、各々の石器の帰属時期について明らかにすることは困難である。また、接合資料および母岩別資料の抽出・検討も時間的な制約から不充分であり、石器群を分析するにあたり多くの問題を含んでいる。

ここでは、素材として用いられる剥片形状の把握の容易な石匙・削器・加工痕ある剥片を分析資料とし、主体的に作出される剥片形状を把握し、剥片剥離・調整加工の実態を把握し、石器群の構造を明らかにして行きたい。

1 出土資料の分析

『素材剥片の形状とその特徴』

a, 石匙(第121図) 石匙には製作意欲の強い諸形態が認められ、各々の形態の石匙には形状の類似する剥片が多く用いられる。石匙はいずれも素材となる剥片の形状を変えることなく作出され、石器の形状と剥片の形状はほぼ一致する。

1類 剥片の形状は左右両側縁が平行し、長方形状を呈する。剥片の長軸は石器長軸に一致することが多いが、剥片が横位に用いられることがある。背面を構成する剥離面は剥片の剥離方向に一致することが多いが、90°異なる剥離方向が観察されることも多い。

2類 2a類の場合、剥片の形状は三角形状(長幅比1:2)を呈する。剥片の長軸は石器長軸に対し、斜交する。背面を構成する剥離面は剥片の剥離方向にはほぼ一致するが、90°異なる剥離方向が観察されることも多い。2b類の場合、剥片の形状は三角形状(長幅比1:1)を呈す。剥片の長軸は石器長軸に一致することが多いが、剥片が横位に用いられることがある。背面を構成する剥離面は剥片の剥離方向にはほぼ一致するが、180°異なる剥離方向も観察される。

3類 剥片の形状は台形状を呈する。剥片の長軸は石器長軸に対し斜交する。剥片が横位に用いられる場合もみられる。背面を構成する剥離面は剥片の剥離方向にはほぼ一致するが、90°異なる剥離方向が観察されることも多い。

4類 剥片の形状は扇状あるいは横長・三角形状を呈する。剥片の長軸は石器長軸に一致することが多い。背面を構成する剥離面は剥片の剥離方向に一致することが多いが、90°異なる剥離面が観察されることも多い。

b, 削器(第122図) 削器には多種多様な形状を示す剥片が用いられるが、素材として用いられる剥片には一定の傾向が窺われ、類型化が可能であった。削器はいずれも素材となる剥片の形状を大きく変えることなく作出され、石器の形状と剥片の形状はほぼ一致する。

縦長・長方形状を呈するもの(第73図483・492、第74図509・511) 剥片の形状は縦

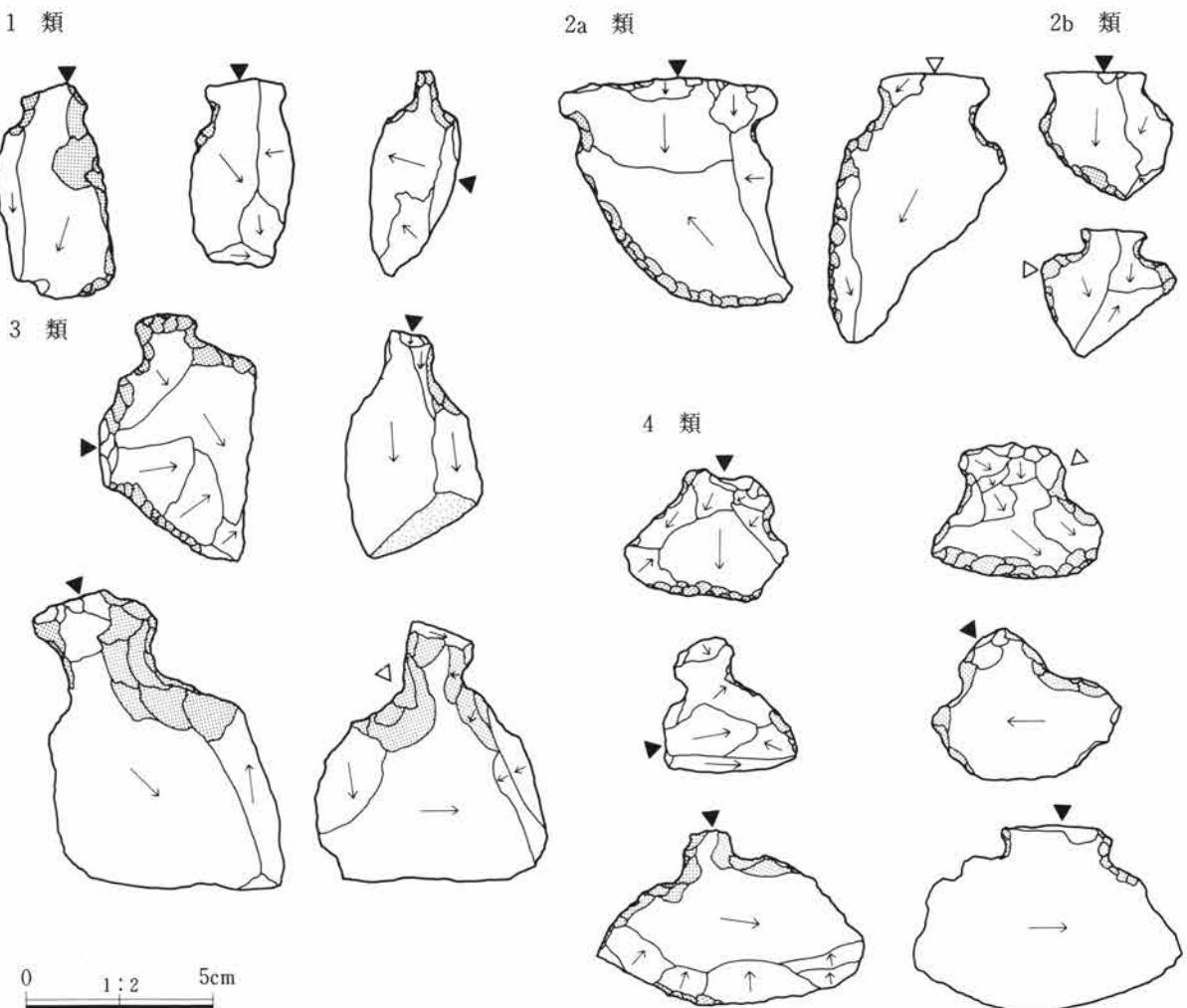
長・長方形状を呈する。剥片の長軸は石器長軸に一致することが多いが、斜交することも多い。背面を構成する剥離面は剥片の剥離方向に一致するが、90°あるいは180°異なる剥離方向が観察されることも多い。

三角形状を呈するもの(第74図495・497) 剥片の形状は三角形状を呈する。剥片の長軸は石器長軸にはほぼ一致する。背面を構成する剥離面は剥片の剥離方向に一致する。

台形状を呈するもの(第73図484・490) 剥片の形状は台形状を呈する。剥片の長軸は石器長軸に対し斜交する。石器背面を構成する剥離面は剥片の剥離方向に一致するが、90°あるいは180°異なる方向の剥離も認められる。

横長・長方形状を呈するもの(第73図482・486) 剥片の形状は横長・長方形状を呈する。背面を構成する剥離面は剥片の剥離方向に一致するが、90°あるいは180°異なる方向の剥離も認められる。

c, 加工痕ある剥片(第122図) 多種多様な形状を示す剥片が用いられるが、素材として用いられる剥片には一定の傾向が窺われ、類型化が可能であった。いずれも素材



第121図 素材剥片の形状と剥離面構成（石匙）

IV. 成果と問題点

となる剥片の形状を大きく変えることなく作出され、石器の形状と剥片の形状はほぼ一致する。

縦長・長方形状を呈するもの(第79図572・575、第80図587・593) 剥片の形状は縦長・長方形状を呈する。剥片の長軸は石器長軸に一致することが多いが、斜交することも多い。背面を構成する剥離面は剥片の剥離方向にはほぼ一致する。

三角形状を呈するもの(第79図578・580) 剥片の形状は三角形状を呈する。剥片の長軸は石器長軸にはほぼ一致する。背面を構成する剥離面は剥片の剥離方向にはほぼ一致する。

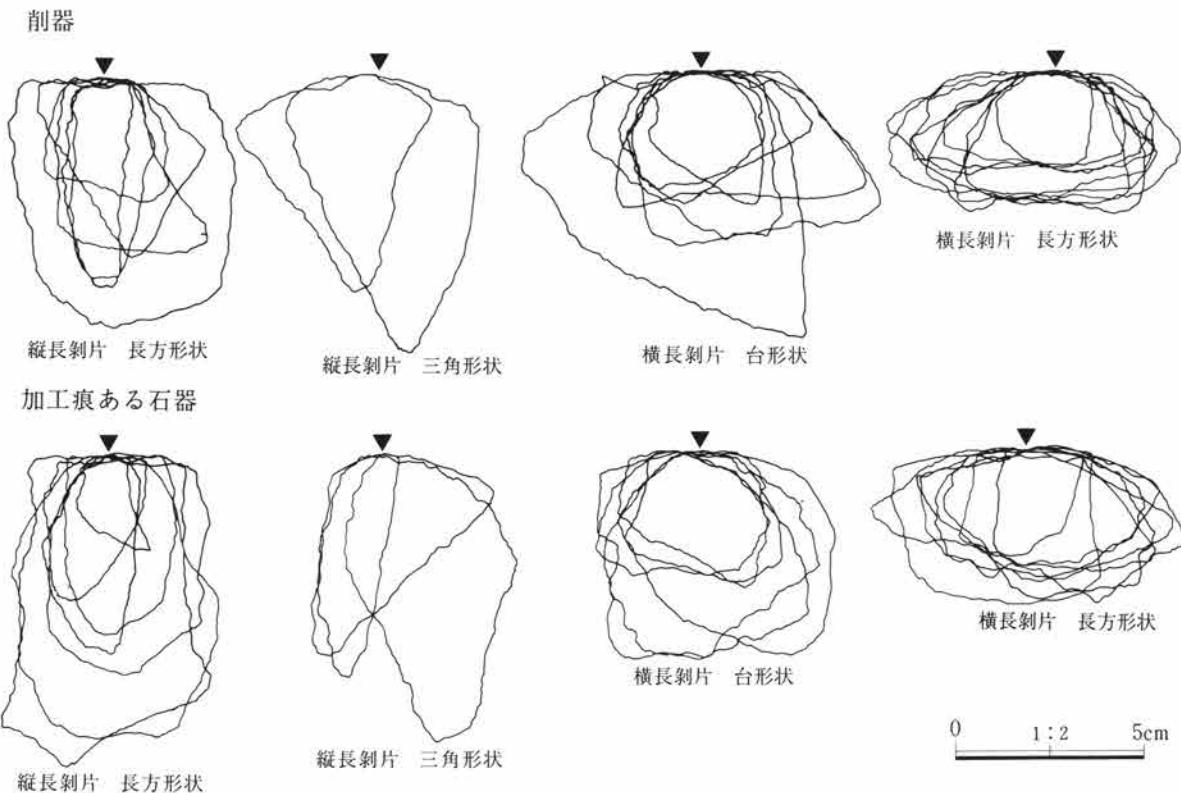
台形状を呈するもの(第80図589・591) 剥片の形状は台形状を呈する。剥片の長軸は石器長軸に対し斜交する。背面を構成する剥離面は剥片の剥離方向にはほぼ一致するが、90°あるいは180°異なる方向の剥離も認められる。

横長・長方形状を呈するもの(第81図595～609) 剥片の形状は横長・長方形状を呈する。背面を構成する剥離面は剥片の剥離方向に一致するが、180°異なる方向の剥離も認められる。

＜主体的に作出される剥片形状＞

以上の分析より、石器素材となる剥片の形状には第121・122図に示されるような類似性が認められ、主体的に用いられる剥片形状(目的的剥片)として4形態を抽出することが可能である。技術的な側面より以下のような特徴が指摘される。

縦長・長方形状剥片は、背面に形成される稜線はその中央付近に認められ、剥離方向はこの稜線に引かれ、剥片端部はこの稜線に制約される。打点はこの稜線上にほぼ



第122図 素材剥片の形状

一致し、大きくずれることはない。打面形状は三角形状をなす。

三角形状剝片は、背面に形成される稜線はその中央付近に認められるが、剥離方向はこの稜線に引かれ、剝片端部はこの稜線に制約される。打点はこの稜線上にほぼ一致し、大きくずれることはない。打面形状は三角形状をなすものと帶状をなすものとがある。

台形状剝片は、背面に形成される稜線上に打点が選択されることはない。打点前方にこの稜線が存在する場合には、頭部調整を施すことによりこの稜線は除去されるが、剥離方向は斜交する稜線に引かれ、剝片の形状は台形状を呈すこととなる。打面形状は三角形状をなすものと帶状をなすものとがある。

横長・長方形状剝片は、背面に形成される稜線上に打点が選択されることはない。打点前方にこの稜線が存在する場合には、頭部調整を施すことによりこの稜線は除去される。打面形状は帶状をなす。

2 剥片剥離のあり方

類型化の可能なこれらの剝片には、背面に示される剥離面構成はいずれもほぼ同様な状態を示し、類似する剝片剥離工程上に作出される可能性が指摘される。と同時に、〈縦長長方形状剝片・三角形状剝片〉の一群および〈台形状剝片・横長長方形状剝片〉の一群には打撃点の選択および頭部調整の有無など技術的な相違が認められ、これらは互いに異なる剝片剥離工程上に作出される可能性も指摘される。現状では、類型化の可能なこれらの剝片(4種)は分析資料に主体的に用いられることから目的的剝片として把えられ、剝片剥離は明確な意図のもとにおこなわれることが明らかである。資料的な制約により明確ではなく可能性として指摘されるに過ぎないが、互いに異なる剝片剥離工程・二種の存在する可能性が強い。

3 調整加工のあり方

a, 石匙 調整加工は浅くつまみ部および機能部の作出には限定されることが多く、素材となる剝片の形状を大きく変えることはない。縦長剝片を用いる場合には両側縁に、横長剝片を用いる場合には剝片端部にそれぞれ施される。

b, 削器 調整加工を浅く連続的に施すことにより機能部は作出されるが、素材となる剝片の形状を大きく変えることはない。縦長剝片を用いる場合には両側縁に、横長剝片を用いる場合には剝片端部に施される。

c, 加工痕ある石器 調整加工は浅く、かつ、素材となる剝片の形状を大きく変えることはない。縦長剝片を用いる場合には両側縁に、横長剝片を用いる場合には剝片端部に施される。

調整加工は機能部(つまみ部・刃部)の作出、あるいは、バルブの除去に限定され、素材となる剝片の形状を大きく変えることない。

4 石器群の構造

石器群の構造は単位的な石器群に組成するすべての器種を対象とし、器種レベルあるいは形態レベルにおける石器の製作工程を明らかにするなかで把えうるが、集団の規範あるいは規制をも反映するはずである。

IV. 成果と問題点

註2 『三原田城遺跡』 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1987
註3 『中棚遺跡』 昭和村教育委員会 1986

註4 前期・初頭段階の三原田城遺跡では、細粒で比較的均質な石材(黒色頁岩など)が両面調整の施される石匙(以下、精製タイプと呼称する)8点・周縁調整の施される石匙(以下、粗製タイプと呼称する)42点に、極細粒で均質な石材(黒曜石など)が精製タイプの石匙11点・粗製タイプの石匙1点に用いられている。前期・後半の中棚遺跡では、黒色頁岩などが精製タイプの石匙2点・粗製タイプの石匙30点に、黒曜石などが精製タイプの石匙4点・粗製タイプの石匙1点に用いられている。

註5 中島庄一 「使用痕」『縄文文化の研究』7 1983

^{註2・註3} 本遺跡および周辺の遺跡より出土する石器には、石器石材および石器形状など互いに類似する傾向が指摘される。

石器石材については、各々の器種レベルにおいて比較した場合には主体的に用いられる石器石材として黒色頁岩を挙げることができる。これらのうち、石鏃および石匙には対象的な石材選択の傾向が認められ、石鏃には黒曜石・チャートなどが、石匙には黒色頁岩などがそれぞれ主体的に用いられる。^{註4}

石器形状の作出状況については、石鏃には石材による相違は認められないが、石匙には石材による石器石材による作出状況に相違が認められる。調整加工(両面調整と周縁調整)の相違より、石匙には精製タイプの石匙と粗製タイプの石匙とが認められ、精製タイプの石匙には黒曜石・チャートなどが、粗製タイプの石匙には黒色頁岩などがそれ多く用いられる傾向が指摘される。精製タイプの石匙と粗製タイプの石匙とを比較した場合には、数量的には粗製タイプの石匙が多くを占めるが、当然のことながら石器形状の指向性に著しい相違が認められる。

本遺跡出土資料を対象とする分析より、各々の剥片は類型化も可能であり、体系的な剥片剥離工程を背景に作出されること。調整加工は機能部の作出およびバルブの除去などに限定されること。の二点が指摘され、石器形状は剥片形状に一致することが多い。これらが同一の技術基盤上に存在することは明らかである。

石器石材・石器形状の作出状況および本遺跡出土資料を対象とする分析により指摘される以上のことから、石器の製作には明確な「製作意図の相違」の存在が指摘される。石器のかたちには「機能的側面」のほかに「文化のかたち」あるいは「生活様式を示す側面」などが重複することが指摘されているが、石器が一連の石器製作工程を経た後に作出されることから、石器の製作にもこれらの側面を反映することが明らかであり、この場合の「製作意図の相違」には後者に近い意味が含まれる。石匙の場合、精製タイプの石匙と粗製タイプの石匙との相違が素材剥片の形状に制約されるものではなく、対象あるいは用途の違いを反映する可能性が指摘される。

豊富な器種組成を示す縄文時代にあって、石器の製作が明確な技術体系のもとにおこなわれ、素材剥片の形状には類型化も可能であり、また、素材剥片の形状によって調整加工の増減が図られるが、石器器種と石器石材および石器形状などには明らかな指向性が指摘されることより石器の製作には明確な製作意図の相違が認められ、これらが互いに密接にかかわり、単位的な石器群は構造をなし存在するものとさえられる。

分析には資料的な制約により多くの不充分な点が指摘され、また、単位的な石器群による検証が不可欠であるが、石器製作の様相についておおよその見通しを得ることとなった。石器の製作および組成には地域性を反映することが予想され、上記の分析より石器群の変遷および石器群の構造的変質について少なからず推察することも可能であるが、早期段階あるいは中期段階の石器群の様相については不明確な点が多く、地域性を示すためには今後における資料の集積と詳細な検討をおこなう必要があろう。